

開催地名：沖縄県浦添市	
開催日時	令和元年 10 月 29 日（火） 14:00～15:30
開催場所	浦添市役所
語り部	小向 孝子 （岩手県遠野市）
参加者	市職員 約 50 名
開催経緯	<p>これまで本市では、大きな災害を受けていない。台風は、毎年沖縄県に数個やってくるが、本市に関して言えばほとんど被害がない。そのため、市職員の災害に対する危機意識が薄い。今回は、遠野市で被災された小向様のお話を伺い、災害や防災に対する意識の向上を図りたいと思う。</p>
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>3月11日に発災した東日本大震災において、私たちは後方支援活動として、沿岸被災地に物資の支援とボランティアの支援等を行った。その際に、様々な自治体や企業から物資の支援をいただき、それを被災地に届ける活動を行なった。</p> <p>発災した当時、私は主に物資班の中の炊き出しを行なった。具体的には避難者への食事支援と、被災地へのおにぎり作りである。その後、文化財レスキュー活動、献本活動等にも携わった。その体験をふり返り、検証する。</p> <p>（２）震災時の活動について</p> <p>遠野市は、古くから災害に強いまちとされていた。1896年、明治29年に発生した明治三陸地震津波では、沿岸部へ物資のみならず、作業員、馬などの労働力をいち早く提供し、ゆかりのある沿岸部の復旧に努めた。このように災害に強く、交通と交流の結節点であった歴史的な背景に習い、平成19年には地震・津波災害における後方支援拠点施設整備構想をまとめ、いつ起こるか分からない災害に備えてきた。また、同年9月には、岩手県総合防災訓練が開催され、自衛隊とも連携し、中継救援基地設置訓練、派遣訓練、救援物資の仕分け・搬送訓練も併せて実施された。</p> <p>そのような中、東日本大震災で遠野市は震度5強の揺れに襲われ、すぐに災害対策本部が設置された。遠野市は市庁舎が損壊したが 人的被害は少なく、沿岸地域への後方支援を行った。地震発生後50日間で、被災地への救援物資搬送は250回、物資としておにぎり14万個、米10キログラムの袋を3,800袋、その他水、衣類、寝具、燃料などを送った。</p> <p>（３）避難所運営の課題</p> <p>初日から12日の朝までは職員だけで対応した。12日以降は日赤奉仕団の女性と、ボランティアの方々に手伝っていただいた。当所の避難者、約400名であった。すぐに物資の供給を始め、非常用照明を設置した。停電でトイレまで</p>

のルートが暗かったため、携行用のライトを置いた。震災後、避難所運営に関する検証記録集を作り、そこでも課題とされたが、停電に備えた非常用電源の備えが必要である。さらに、避難所出入りの規制をしていなかったため、4月頃から不審者と思われる訪問者があった。避難者から不安の声があがった。これも改善点であると思う。

良かったこととされた点は、毎日朝夕2回開催した全員によるミーティングで、情報共有を図ったことである。避難者個別票を作り、仮設住宅入居や他の避難所への移動に活用した点も評価された。

(4) 文化財レスキュー

もう一つ、私が関わったものに文化財レスキューという活動がある。大槌町では、図書館の1階や倉庫に保管されていた書籍や昭和の津波の資料等が水浸しになっていた。大切な東北の文化財を守らなければという使命感から、4月以降はこれらの資料のレスキュー活動(乾燥、洗浄作業)も始めた。全国から集まった本を分類・整理したうえで、現地の意向に沿って「必要なときに」「必要な本を」「必要な数だけ」岩手県内を中心に寄贈する献本活動を行った。また、遠野や首都圏などでシンポジウムや展覧会を開催し、出版物を刊行して被災地の状況を伝え、支援の輪を広げる情報発信も行った。さらに、3つの柱として三陸文化の復興を支援した「三陸文化復興プロジェクト」としての活動を実施した。



開催地より

語り部がご対応された後方支援活動の内容について、具体的にお話いただくことでとてもよく認識することができた。文化財の乾燥・洗浄作業など、なかなか知る機会のないことも伺えた。